



董氏書錄

五

15
12
5止



曾
12
卷
5



兼葭堂雜錄卷之五

浪華

前鐘成曉

晴翁撰



徒然草第百九段云錄倉の海は川のほとり魚は彼らよりいふとさういふ物
 此頃ゆかぬ物なり夫も錄倉の年寄の申侍りし此魚おのま
 若かりし世まごころくぬ人の前へ出ると侍らざりし頭ハ下部もろく切
 り捨侍りしは也と申さるる物の世の末よふれと上さぬまごころ入る
 少も侍り。隱解の論云此章堅魚の事なり古今の變俗なりある
 とくとも全く堅魚の支なり堅魚の支なりある夫堅魚の諸所
 有て別り土佐と上品とせり能々考ふるも錄倉とさういつひも詞なり
 見よ録倉武士とさう堅魚と見へり當時太平記の乱なり

兼葭堂雜錄卷之五

武家威勢とついでに帝徳と犯し給ふことと歎く堅魚と比して斯いふ事
萬乗の君といふも世の盛衰の難い事なり衆人の盛衰歎く
まづこの教あり尤兼好との世よりれば繁昌の武家と批議せしむる慎の
第一の堅魚とよせし己事と得ざるの情と述るる蓋録倉の海又堅魚と
いふ其の彼さういふさうさうな物と此頃りくる物さういふ録倉武士彼
録さうの境地にあわく威勢とついでに無双りて今此頃天下の人々も持賞りの也
と當時の盛んさうと拳の詞あり夫も録倉の年寄の申侍りて人の物語ふ
きて兼好さういふ意趣とのさう此頃り若さういふ世まていふさういふ
人の前へ出ると侍りさういふ今繁昌の武士ども已等が若年の時まていふ
さう歎決断して上朝家の前へ狼ふ出ると侍らざういふさう頭へ下部も

くらげ切て捨さういふ物さうと申さういふ頭と相摸入道とて言ふん此入道甚
無道なり放逸無慙のさういふ故天下の今さういふ結ひ終る天の罰さういふ尊氏
義貞赤松と俱は起りて録倉両六波羅と破りて頭さういふ入道の命令と聞さういふ
者さういふ下部に至る入道の下知と甘く喰さういふ故罪さういふ切て捨さういふ物語
さういふさういふ者も世の末さういふ上さういふも入立さういふ侍れと兼好年寄の
物語と受さういふ意と述られ之抑相摸入道悪逆日々長天下の大謬と成さういふ尊氏
義貞是と亡一旦天下は定まらざういふ時又尊氏の勢強くなりて大塔宮とついで
其外官方と押さういふ終は後醍醐天皇と追奉るこれ依る新田楠宗と支さういふさういふ
御運さういふ御方の兵士とついで亡帝の御勢さういふさういふ尊氏の勢日々さういふ
録倉のついで及んで京師と犯さういふ上さういふも入立又成さういふさういふ此入立さういふさういふ

侍ともの一夕と味ふ時の全堅魚の夏うづらを知べし肉食の事のみならず金と云
とも外に書様も有べし入立の一夕を武門の帝土に入立く我意と云ひ天下ふ
令と出し王命のつとく消衰へる夏と敷くこの文法なり云

此論諸鈔に見るは実も有べく聞へる珍しき事あり出せり

○四位侍従正則船後守葉三宝と信敬志有る夏浅くは職ふ有る日經説は依り偶思へ

らく天竺の尼蓮河の蓮實を得て百八の念珠とありて持てばやと當時肥後長崎

の執事黒川与兵衛正直丹後守此夏と談ぶ正直長壽ふつて蘭人ふ尋求め

ぬふといひく尼蓮河の水深く速く流きて跋提河は落蓮の河岸の入江の如

き所々を生じて花の大さ三尺も過ぐ實も又随く大なりといひ念珠とありて

小なる物を多く有夏とく大なるも実熟し乾くと後水上は落れは河水甚ど

早くして暫も留る夏るれ故より取得る夏希なり我輩利買のくあり彼國界

ふも住るる多少の知べし代手ふ入るる奉るべしと約して後七年を経て日本

来る時とづら一顆の外は求め得る夏の難きなりと述る黒川侯即江府は持

来つて稻葉侯は贈る太守昔日の意樂の念珠は有る人も今大なりと而も

一顆なりと以て塗香を入る器となりて腰に帯して常ふ離るる致仕閑居し

ぬひは後居号番應士命終の期漸近きと臨み故にぬひは是を寂紫居士升庵と授け

ぬひの時元禄丁丑年より升庵平日念する毎に彼冥福を祈りて口は弥陀

の号十聲と称し正徳五年乙未の夏是に至軒中川常平と与りて曰我殘生餘る

故君の回向を生涯に限り夏元より期する所なりといへども願はく猶志ありて相

續せん夏と常守受びて曰先生の其表由りぬひ余也我何と據るは是を愛

繼ん哉と再三辞とれども宿縁あるんをいつや爰より又思入所
めれをうり其求め切るる故に辞とて言あて是よりけ莊嚴を加へ
て家傳ふ色形を述べぬる長朝夕念佛く湖信院泰應玄如大徳と常宇が
一生回向せし上未の謂るなりとぞ

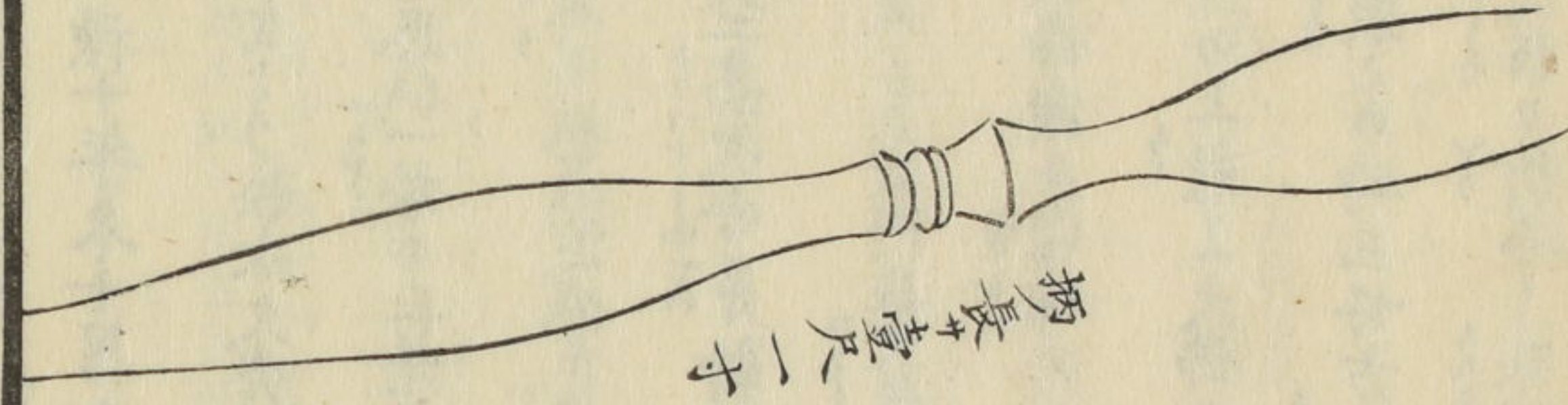
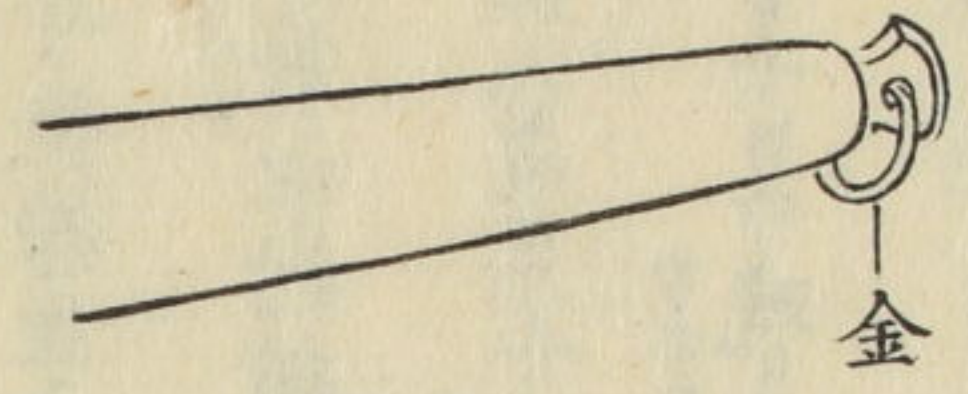
按どうふ天然の蓮の大方く豫く聞及びより南都東大寺の什物は俊乗坊重
源所持の蓮の實は柄杓のり其大口徑二寸三分廣き所徑二寸八分高三寸五分
抄の頭より上の縁金の金具柄黒檀壹尺壹寸次又圖あり俊乗坊名重源姓紀氏瀧口左馬允
季重之舅刑部左門尉重定出家ノ

仁安二年入宋と榮西過于四明州相伴上天台山翌年秋償宋西歸後爲源空上人之弟子改名
曰重源後白河法皇勅頼朝令東大寺再興於是可爲源空大勸進職也源空固辞ス重勅曰門徒
中宜撰舉器量者因以醍醐俊乘坊令應詔而令重源領幹事乃作二輪車大可以容身車之左貼二
詔書右貼幹疏巡行州縣勸萬民經十餘歲成就焉元久二年六月五日寂或云壽八十六
○永祿十年東大寺大佛殿燒失と松永久秀が所爲なりと言傳ふさあなり

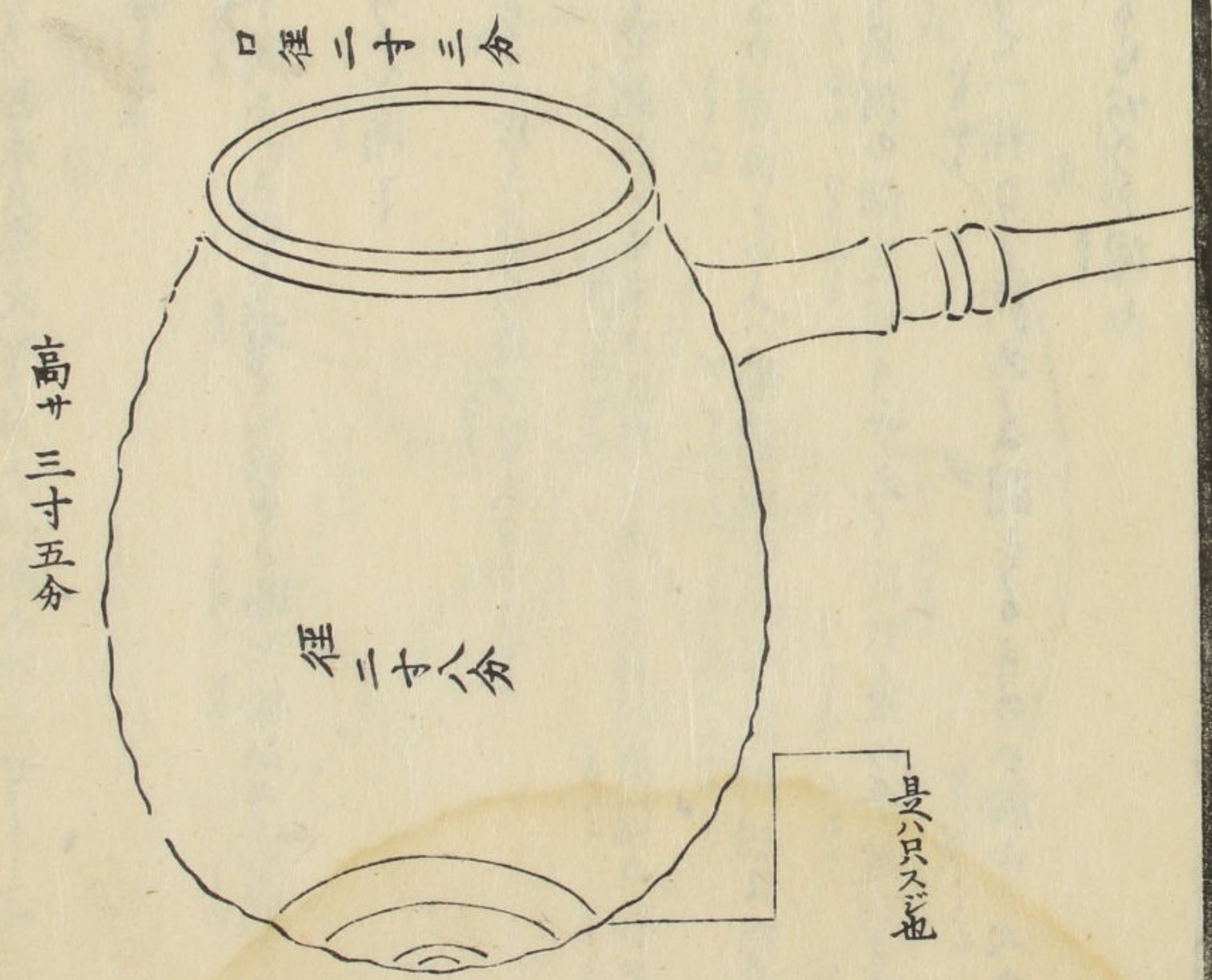


和州諸將軍傳卷三云永祿十年冬十月十日南都東大寺大佛殿燒失其
故如何とるれ同年六月下旬より松永久秀奈良多門の城を築て在住と三好左京太
夫源義述是と聞安く然と思ひ一族の三老臣三好山城守康重入道笑三同下野守慶久
入道鈞開日向守長縁並小庵下城及淀城主岩成主税頭慶之細川六郎氏元松山藏人
久清入道新入齋中村新兵高次舍弟新助高之等五千余人を遣し及掛り
細川六郎松山入道二千余人と右門佐久道が信貴山又在城せしと押し残る三十余
人の南都を通り十日の晩は大佛殿を宿陣し久秀是と聞夜討し馴し兵五百余人
と率し多門の城を出て文の上尅し大佛殿を夜討し遠く切勝追崩し鎗中村
兄弟と始め六百余人を討取その時三好方忙し防ぎ戦ひし小筒火の焼捨置
るが三好方の鉄炮の薬は火移り折るし寒風の事なれば大殿講堂中門西門

俊乘上人所持
蓮實柄杓



蓮生於泥而清淨性忌
糞溺油膩物周茂叔之
云菊花之隱逸者也牡
丹花之富貴者也蓮花
之君子者也且諸佛喜
以蓮華為座亦取清淨
之義耳



回廊ホホらぐく火と有りあり 松永久秀火とけ大仏殿ホ焼亡せしと世間小
言説ハホ 審小考ハ登一云

○山家集云淡川のう田と申所ホハ好者どもり物と拾ひ多々を問られバ
つと申り此拾ふありと申ルヲと聞

一説又此つとけるハ貝ありとモ然れども未ダ其形と云ハされバ彼國の知己
此夏と言サリハ送りらる浦田といハ備前國兒嶋郡淡川村より

浦田の濱とモ海辺なり此ツミ貝何の能益なりやあハ只童の手遊ビ又拾ひ
ありしうらんろ大小ありて一様ありバあハ圖とるりの就中大の部
あり小ありハ經一寸許ありも有り聞

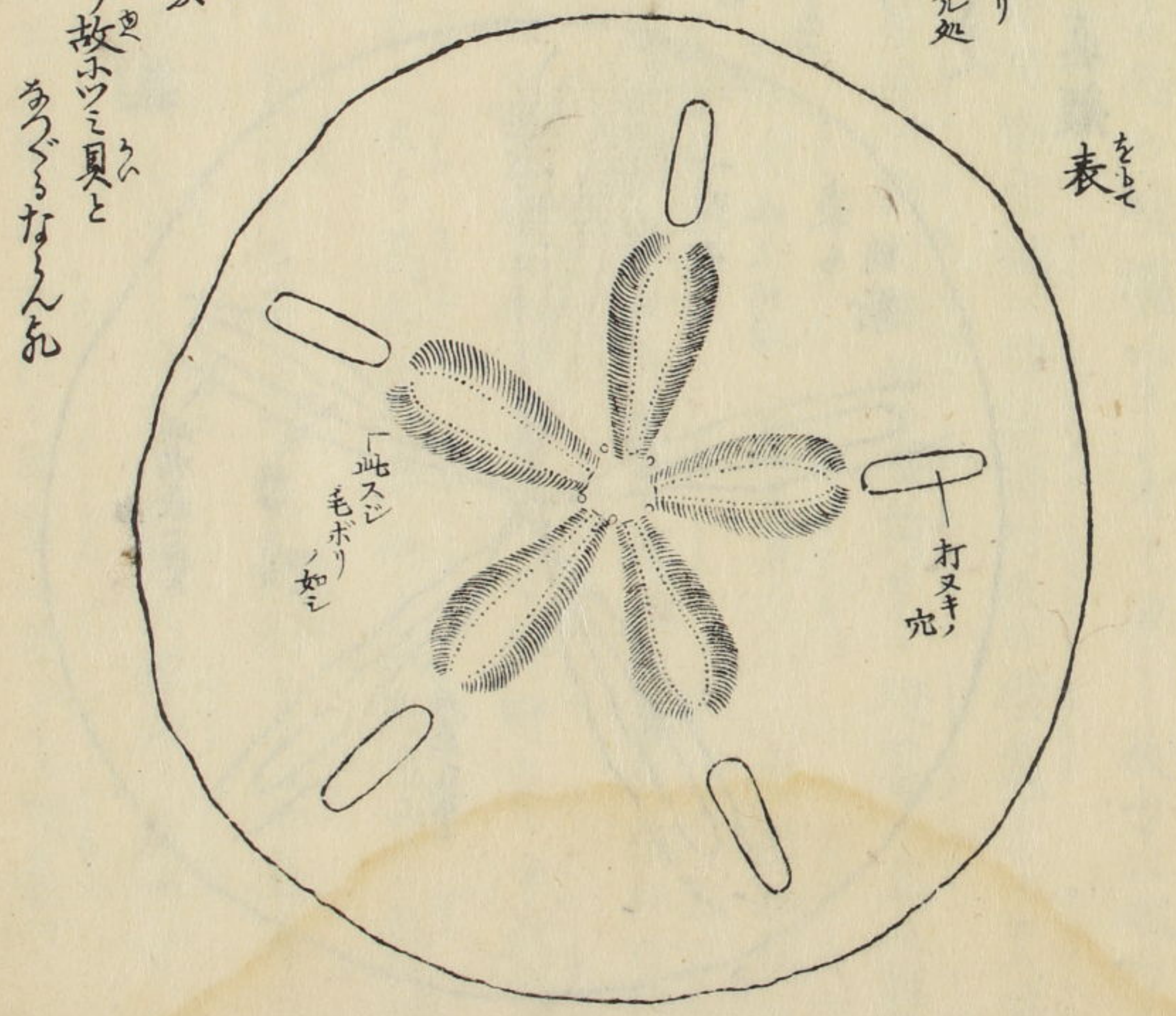
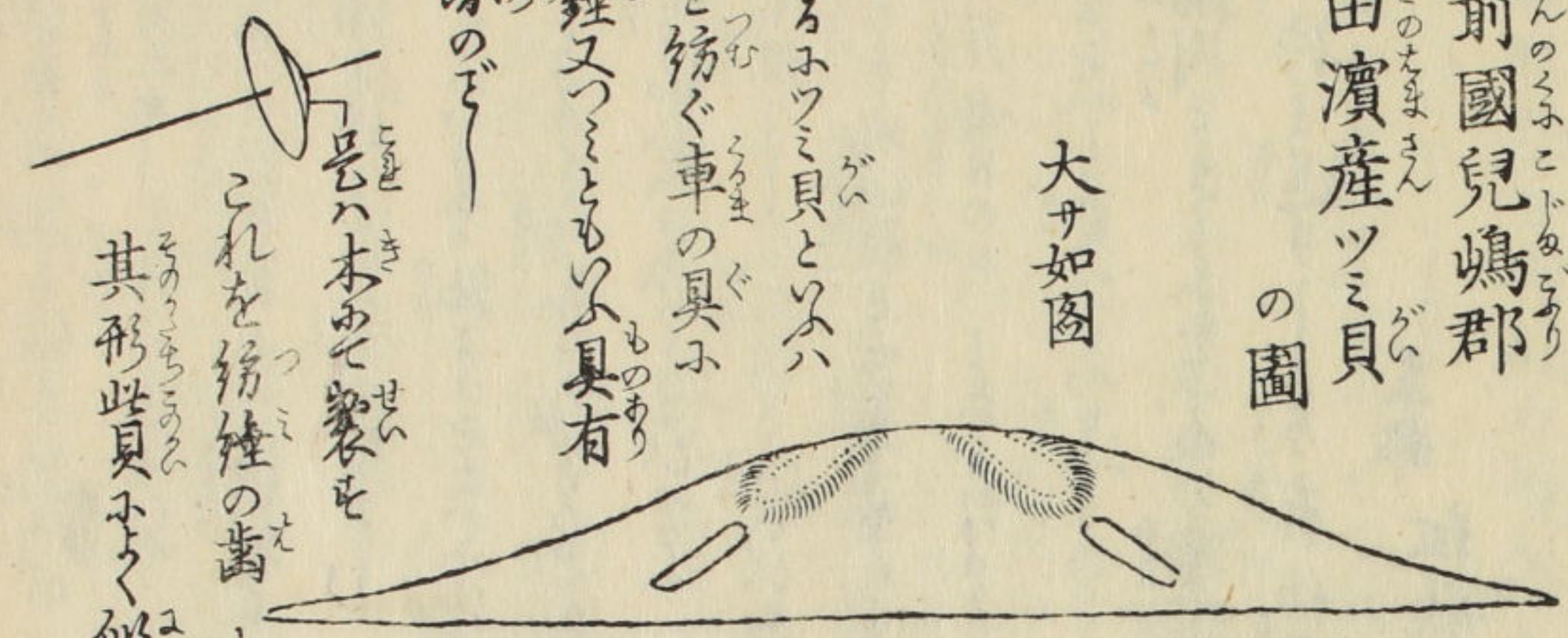
備前國兒嶋郡

浦田濱産ツミ貝

の圖

大サ如圖

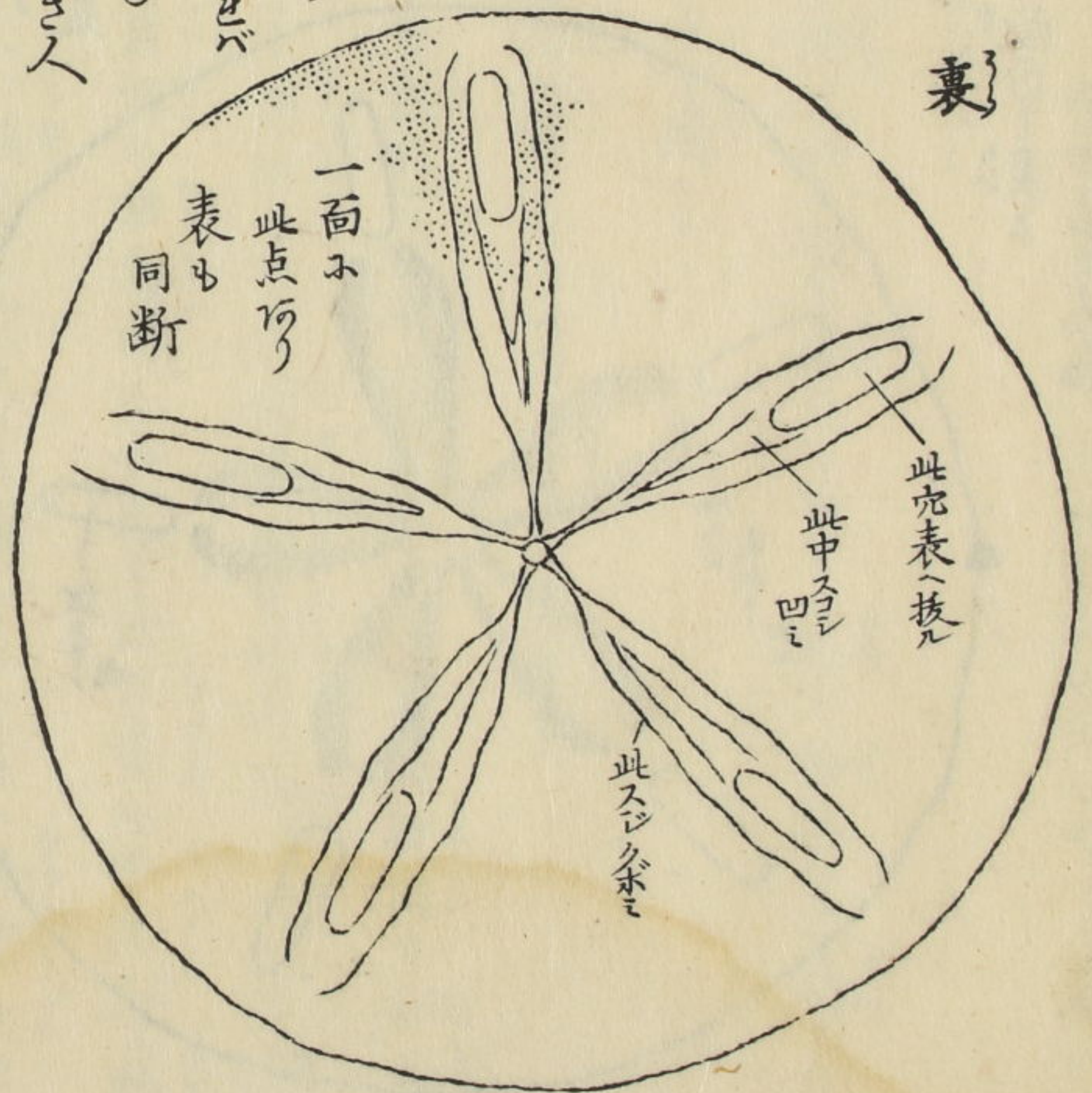
按ズルハツミ貝といハ
糸を紡ぐ車ノ具ハ
紡錘又ツミ貝具ハ有
形ノ如ク



其形此貝小く似たり故ハツミ貝と
あつたならん

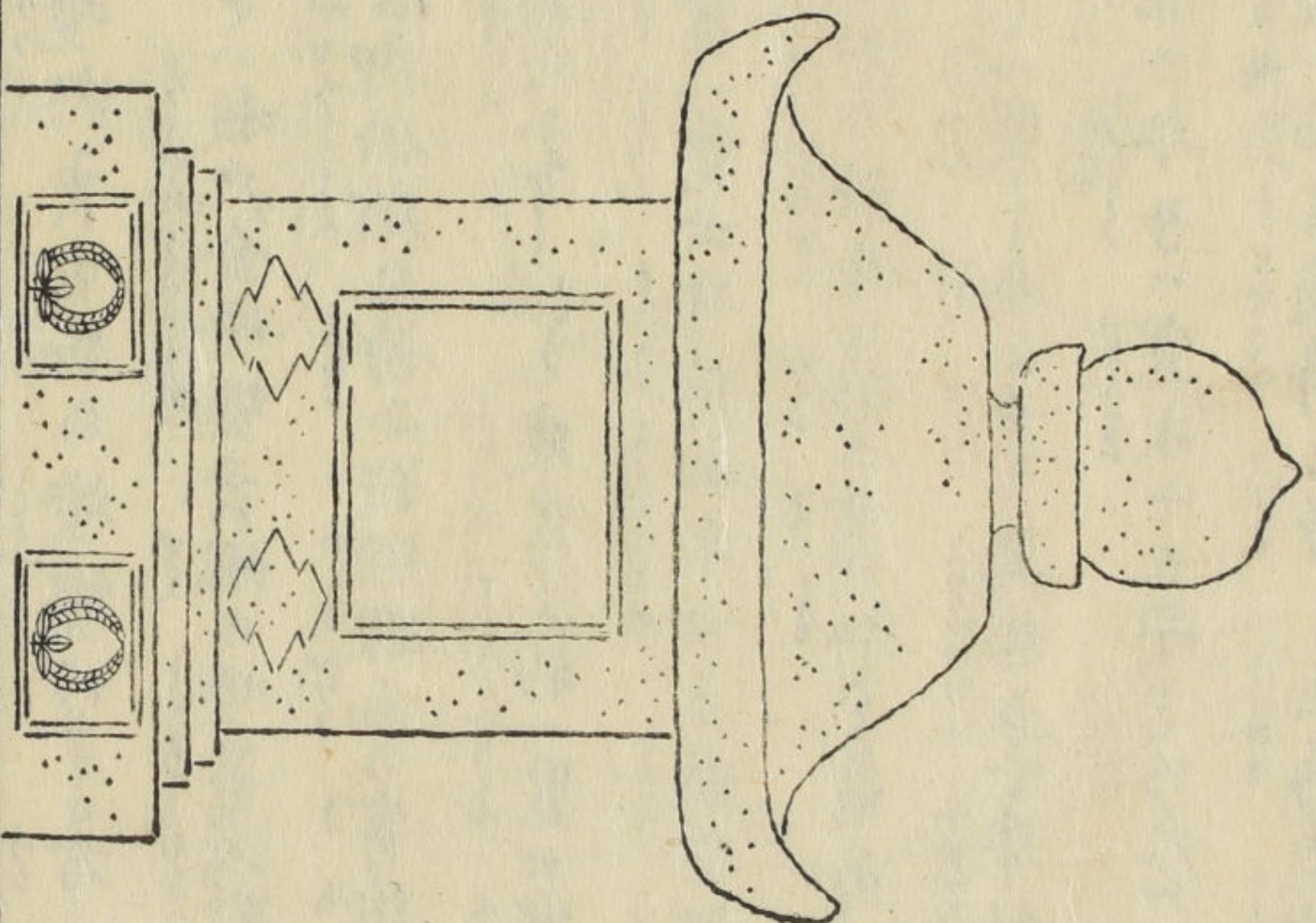
狂歌堂真顔集云佐伯の小碓の
 澗資之由と物ごりのついで
 田位上人の山家集みひは滋川を
 りの浦ははことの貝のつら
 見へるのいふ物もその小碓
 近きとよりとゆきをさ家ののりひ
 作るつやおはさぬうとこひはるふ
 影も残るくくみひくけさびあま
 もてりぬは狂歌せせんんとそ
 みは月海目の口つとくわつるの
 影をそく見ひと送りあされは
 滋川とさるふをぬの登小ぶ
 法と送り一と若佐のよき人

東都 狂歌堂真顔



○南都春日神社の境内の古物の燈燼の中有る拵り杖の
 就中石燈籠ありて枝戸金燈燼の蟬の燈籠淺野侯の燈籠とせんと
 見処ありあま若宮御供所の傍小狩野探幽の寄附せし燈籠一基又狩野
 尚信の寄附一基同所ふとびく建り人物一覽云寛永十三年探幽齋任
 画所法眼云書畫一覽云守信初采女と稱し探幽と号し法印の位小
 叙と孝信の長子なり丹青の妙ハ世の知とゆふと狩野のまは海内
 の画風此法印出ると一變し今に至る其粉本を準的といは延宝中没し七十
 三歳と有り燈籠の年号は寛永十五年と有り没期より三十七年也以
 前より尚信の初名一信自適齋と号し主馬と稱し探幽の弟なり又
 妙手の聞高し慶安二年三十四歳と卒しと同書小見へり燈籠ハ

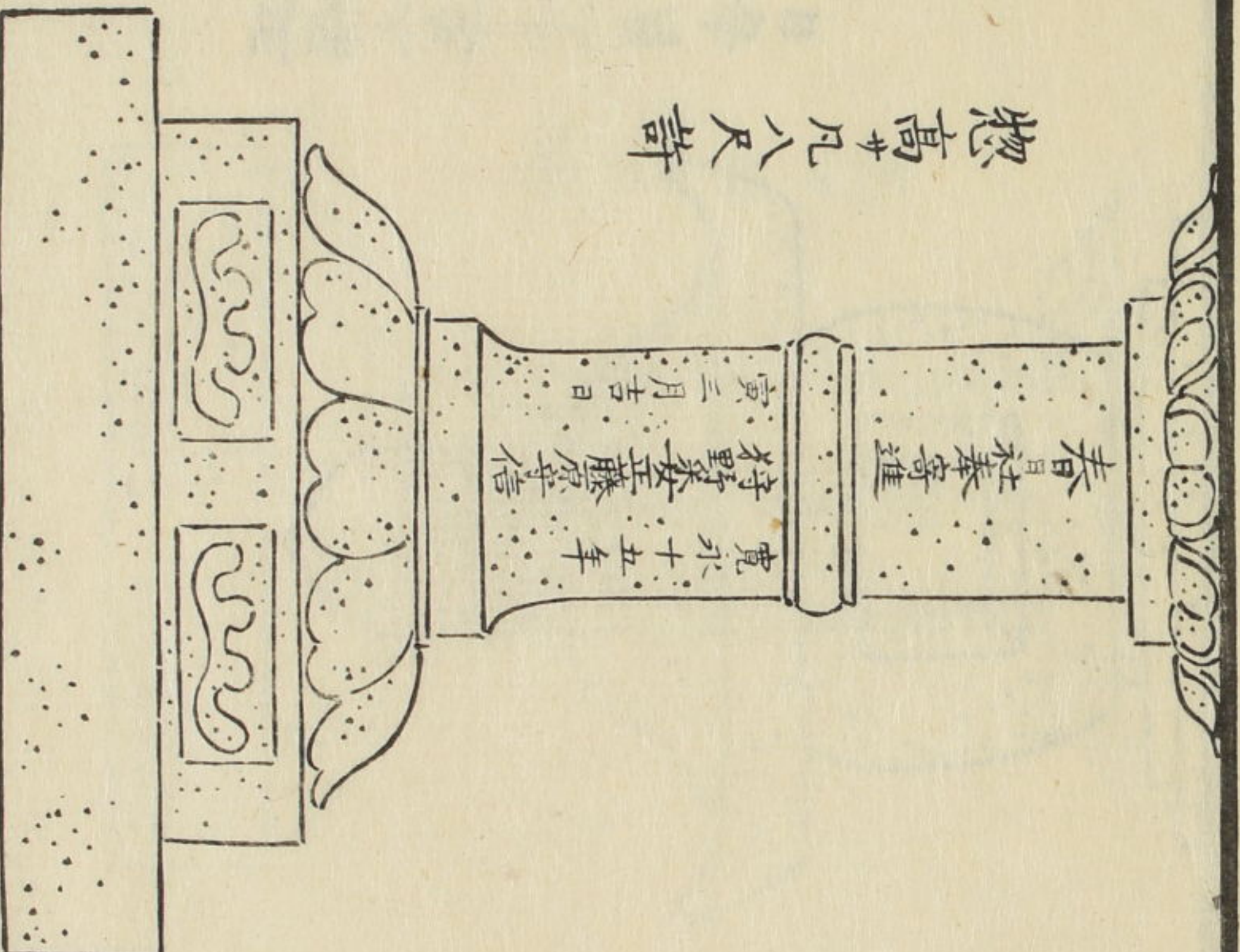
探幽之燈爐之圖
えりのとろのつ



銘云
符野米女正藤原守信

寛永十五年寅三月吉日

惣高凡八尺許



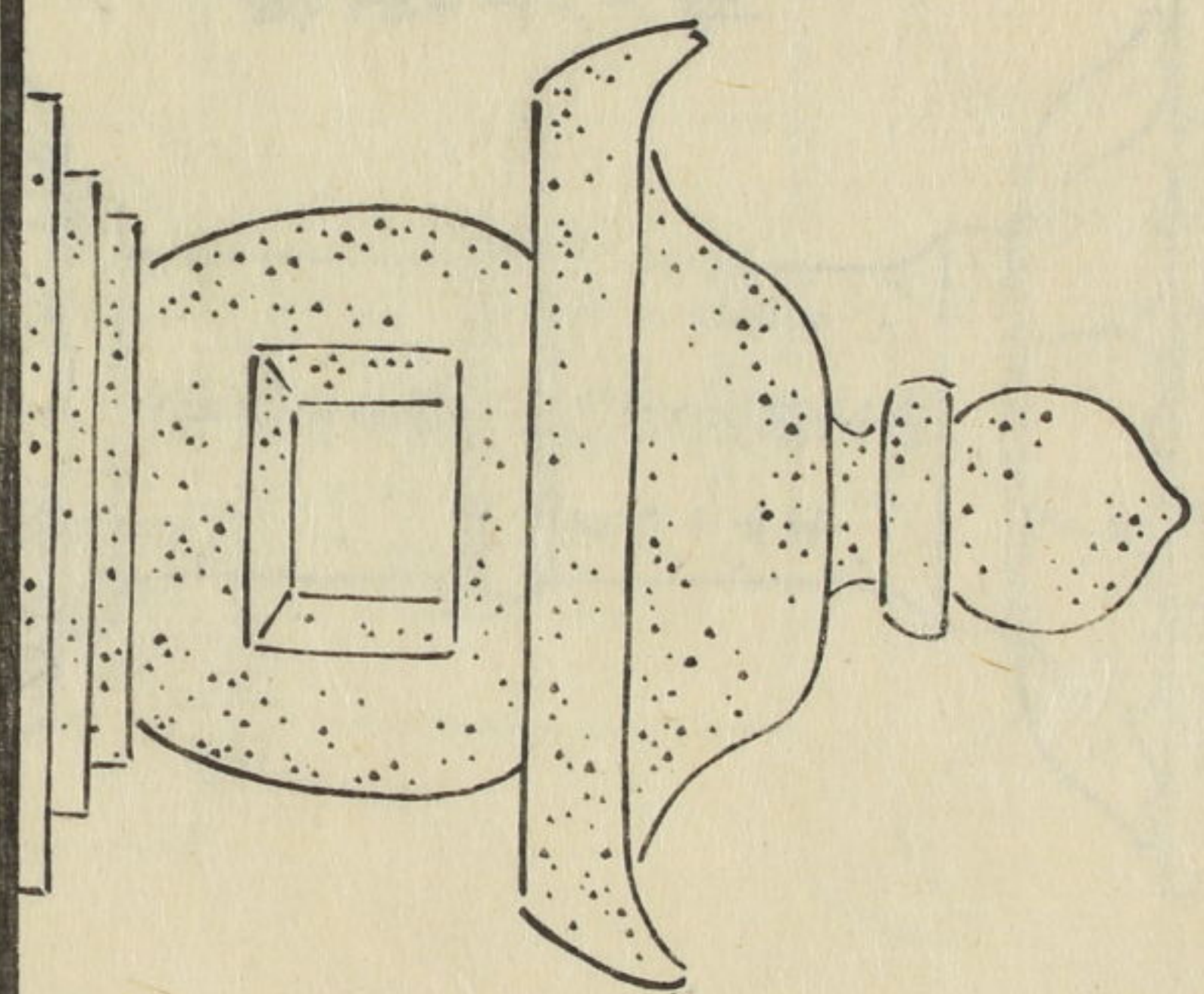
春日社奉寄進

寛永十五年

符野米女正藤原守信

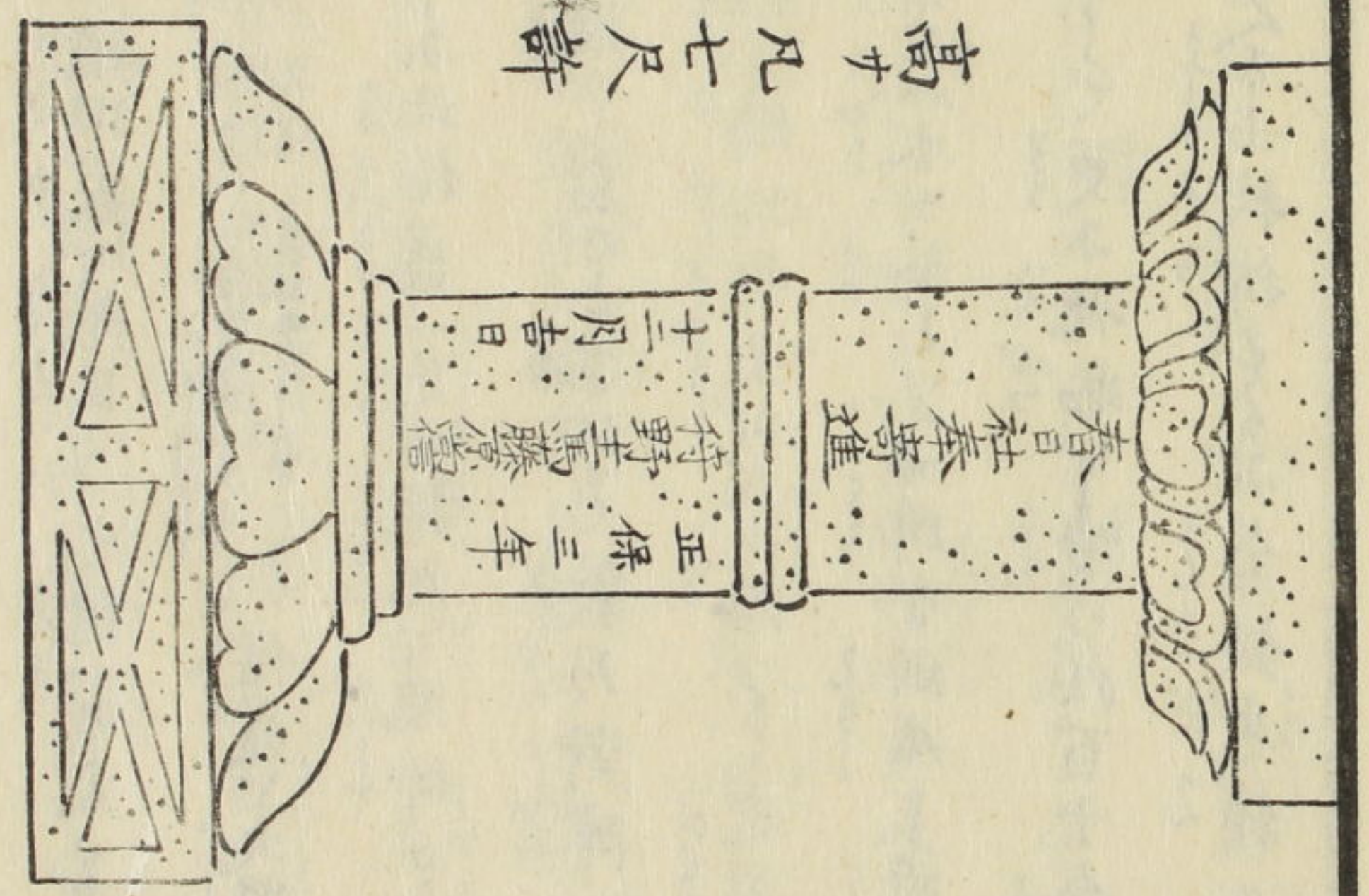
寅三月吉日

尚信寄附之燈籠之圖
おのりまきの
たもと



正保三年十二月吉日

銘云 将野主馬藤原尚信十右



高ナ凡七尺許

春呂社奉寄進
符野主馬藤原尚信
正保三年
十二月吉日

正保三年と鶴一は死期より漸々四年以前あり兄守信小先つ又廿五七年
嗚呼定ぶる世のさへ也正保三年より今年安政四年迄二百十余年及びり

○

佐久間右門尉信盛織田家の老臣ありて隨一の入りしが大阪本願寺と攻ん
たり天王寺に向城と構へ今月江守の地世人尼寺と云信盛と大將として一子甚九郎とやふ

三千余騎とて籠置し此信盛一宗の根元と滅却せん更よりるれ更と思ふが

故に無支小城とて不渡しあむと思ひて數月對陣のしとて茶湯などと飢び

更ふ合戦せりし程に織田信長公大に怒つて追放せしむ信盛浪人と成る

終に播及益井の山奥五加木谷とて所は雨居し同伴の老翁四人と共に住居

平生五加木と食とて更ふ他物と喰りて百十余りて壯健ありとて孫あ

る佐久間久左門とて入る士扶持とて金銀米結の類ひひりて只朝鮮人

參を調へて送りけるも久左門へ送りける短冊に仙家花とてる題あり

あひしを慰むやとて山分けのたのむるやみ路 佐盛

又裏書に慶長十七年三月十八日とあり此幽谷とて二丁四方が程に五加木と

る生繁りて頗る難所とて経て行くに山分りてを實ふ末世の仙とて

なり此久左門の君公との孝慈と感せられ御あが用ひ有りとあり

○

宝曆九年四國路の産るより達磨男と号せし者浪華に登りて道頓堀に於

て觀物とせし大に評判高く繁昌せり抑此達磨男といふ兩脚とも膝頭より下

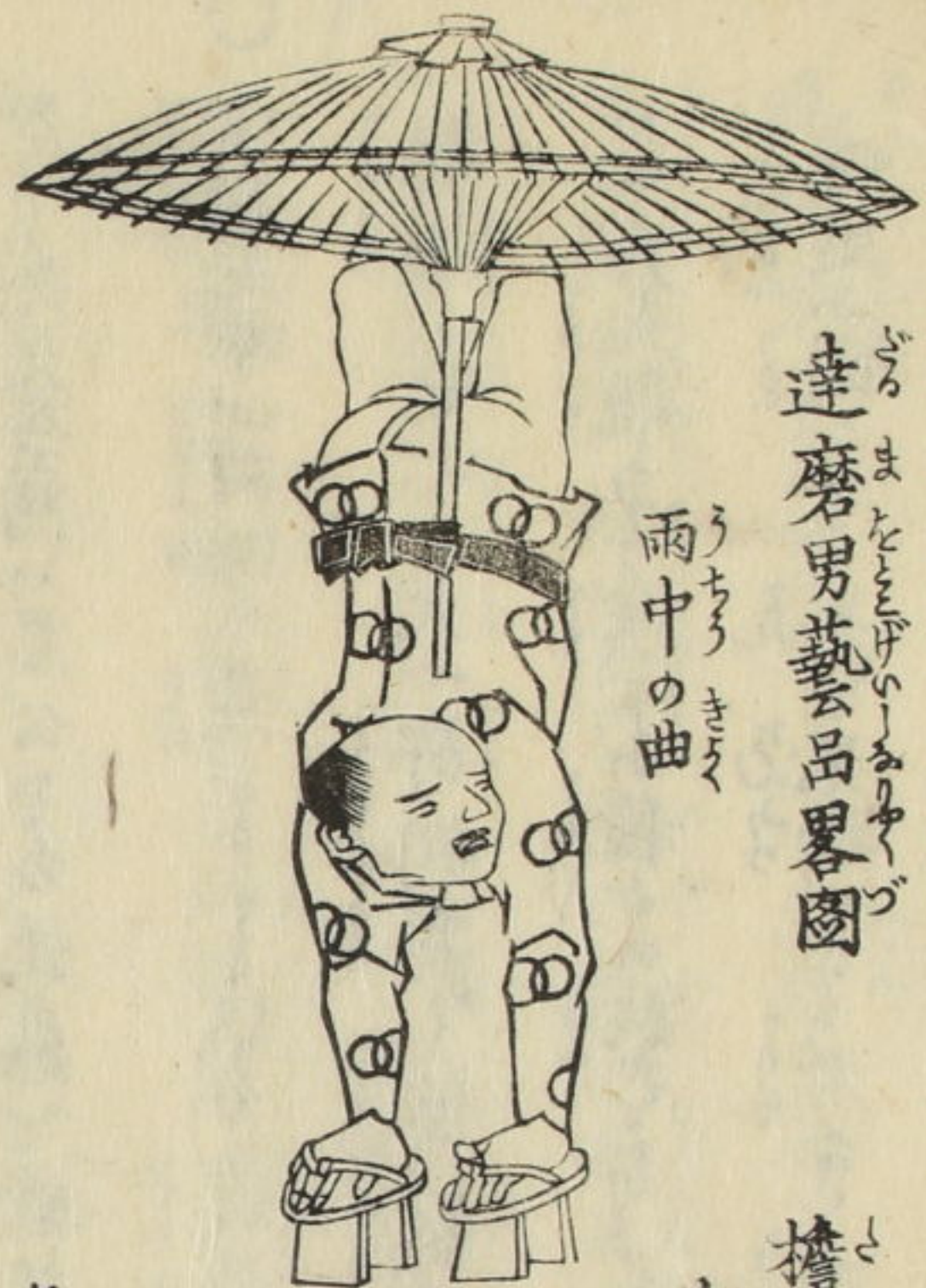
のせに支離なり然る種々の藝ありて諸見物に嬉しむ實に前代未聞の人物なり程に

遠近に聞えし是を見物せざる者も近來前後に雙りて大繁昌ありしが延宝

あり實一對の奇観とりのり

達磨男藝品畧図

雨中の曲



改浦川公佐画

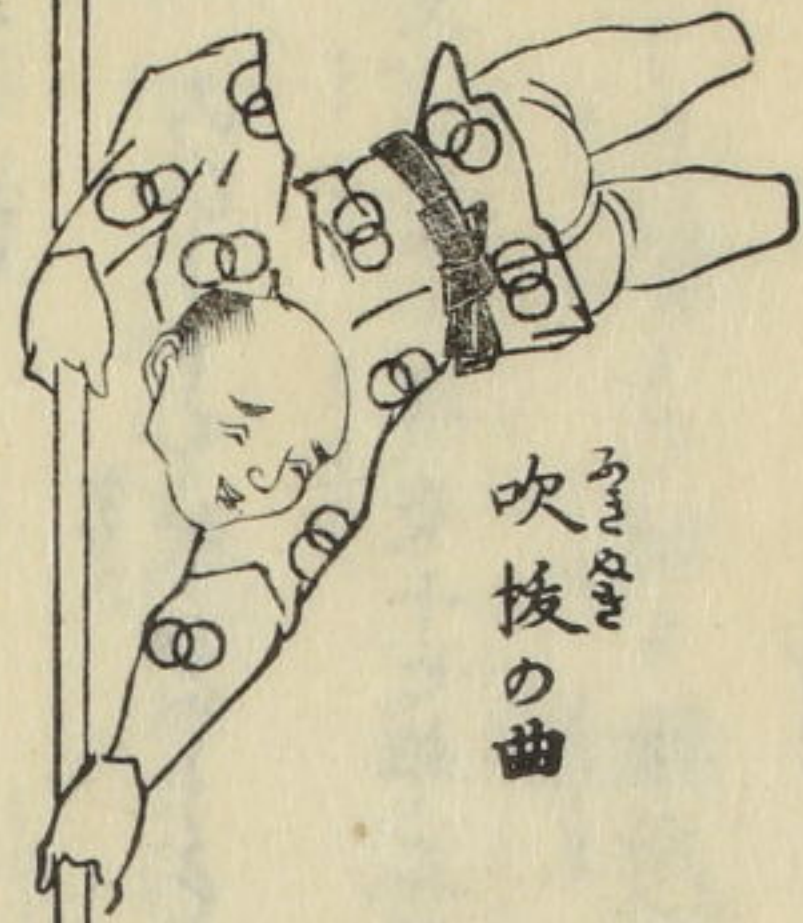
擔桶水を入腰を

荷ひ手あて歩む

天秤がけの曲

板を立く其上よ
逆立の曲

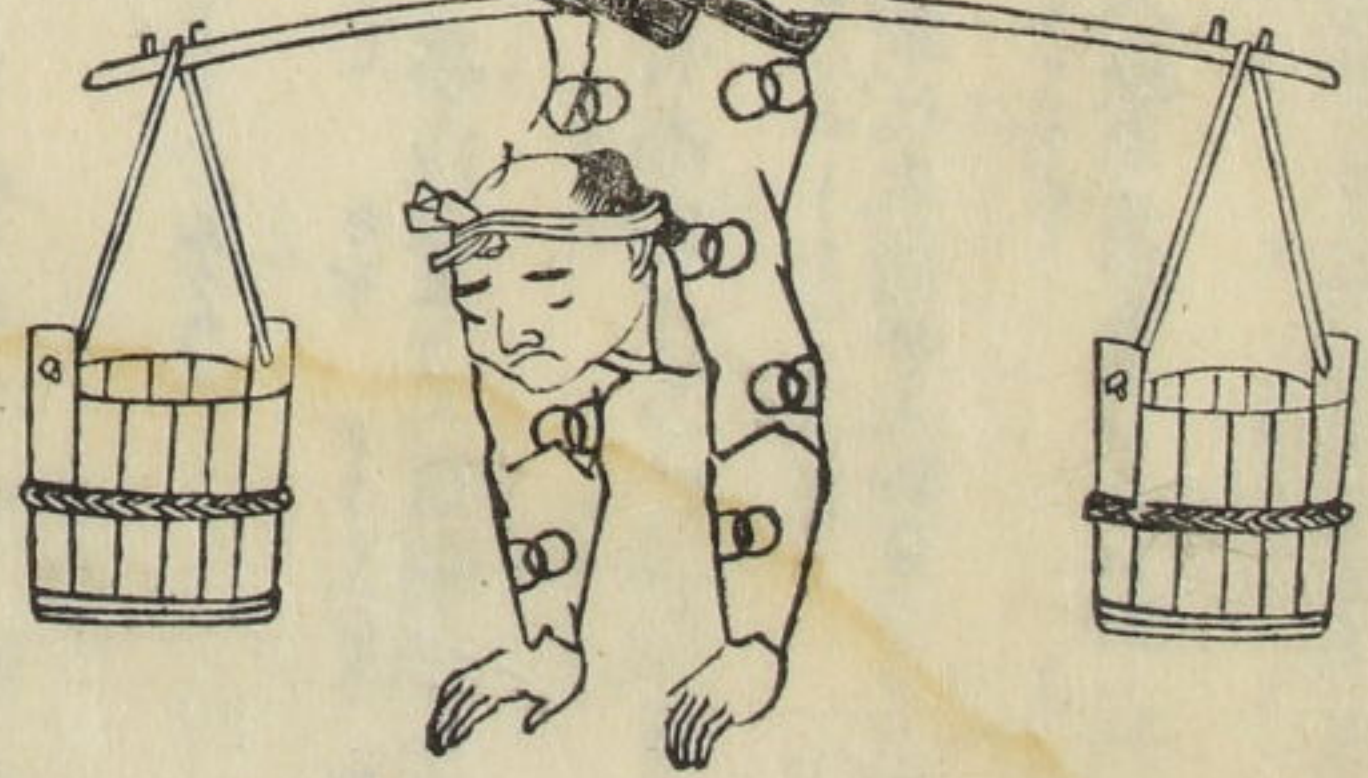
の曲



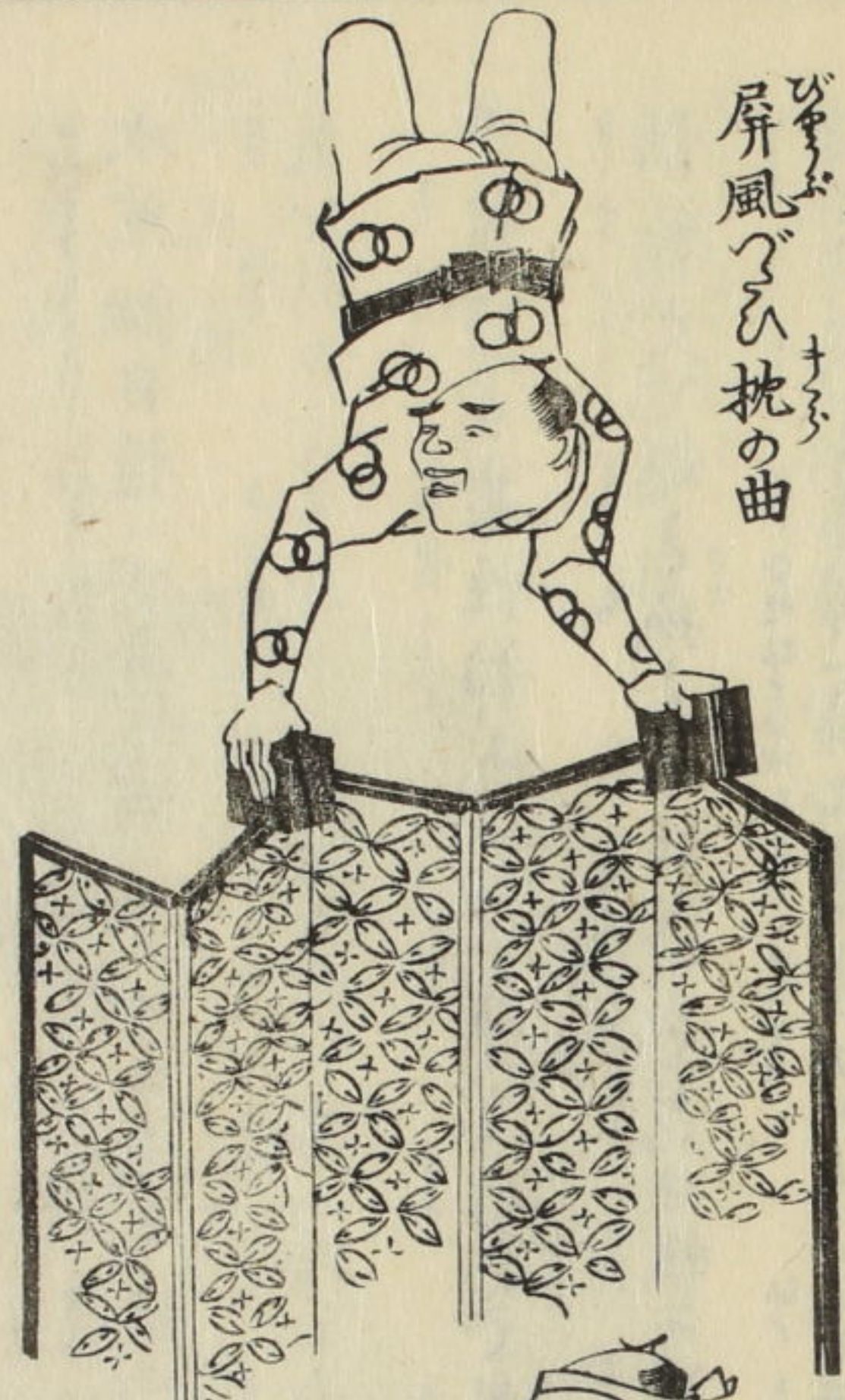
吹抜の曲



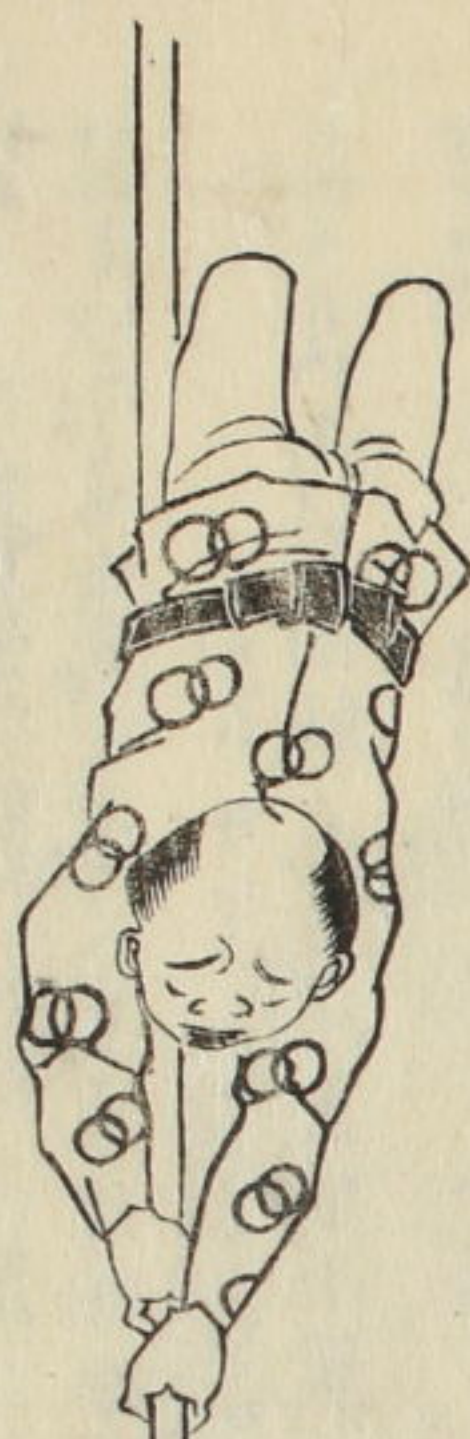
の曲



屏風づゝ枕の曲

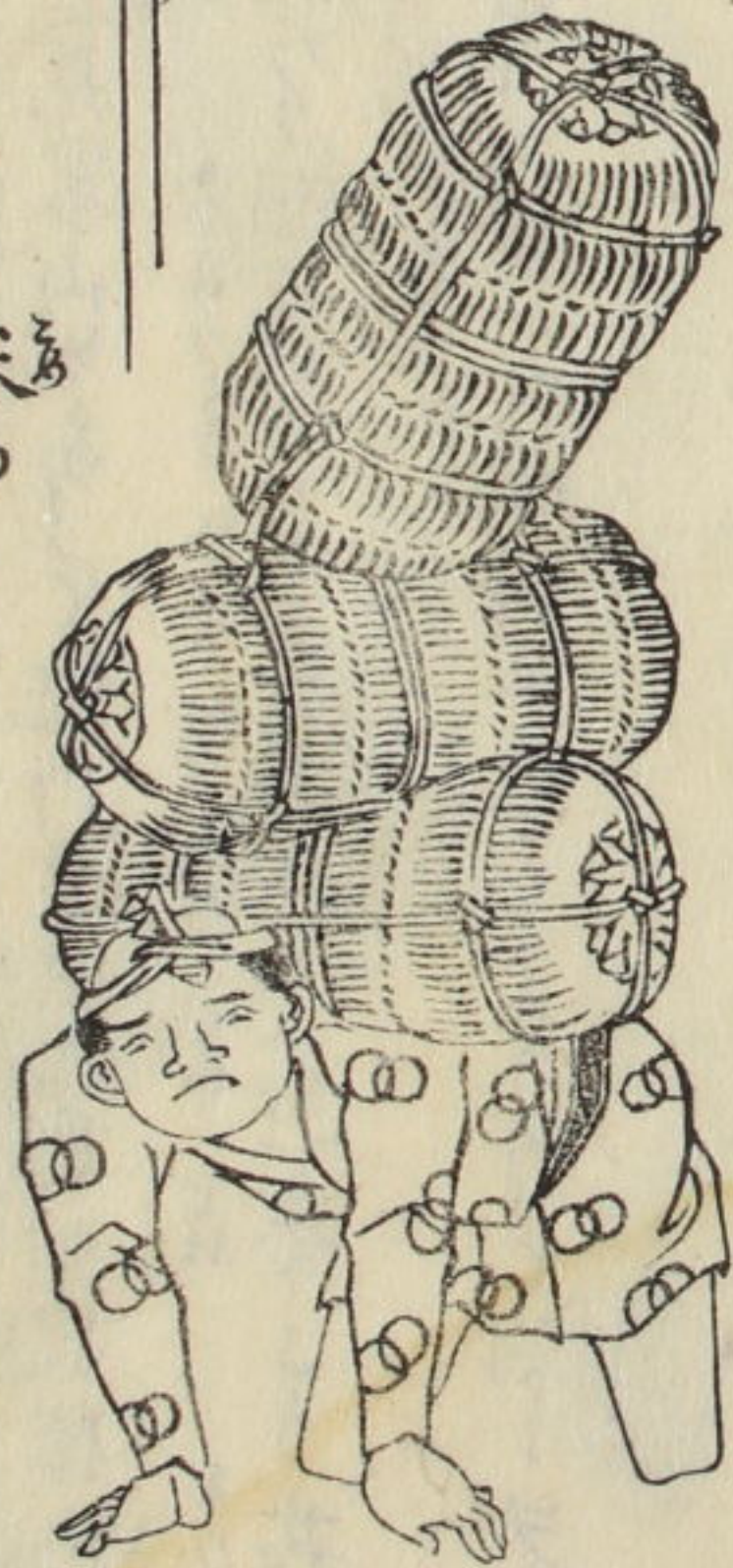


鉄拐が峯坂落一の曲



尚此余許ま曲あり畧を

米の曲持



高欄獲づゝの曲



○文化六年冬浪花道頭堀ふらて獲て観物と云昔より其名と聞ひて画きたるを見とて生物と見し更なる物也見客山をありて流行せり凡其形状猿の大あるものなり面赤毛色亦大同小異なり面色黒く毛色鼠色亦茶と帯り其頃在留の蘭人加比丹人名コレキドツロの云此猿ハ瓜哇國ニ産するものなりコレヲト号くると實ニ稀代の観物なり

本草綱目猿ハ川廣の深山の中ハ産と猿ハ似く長大あり其臂甚長く能氣を引ぬる多壽なり其臂骨を笛ハ作るハ甚清亮なり其色青白玄黄緋の數種あり其性静みく仁慈なり好んで果實を食ふ其居處多く林木ハ能數丈と越く地ニ著池浮くと死す惟ハ附子汁を飲ハ免る一其行は多く群る其鳴くと善啼一鳴三聲凄切なり人の肝脾ハ入或云黄なるハ是牡なり黒きハ

是牡なりと按むるハ當時の

猿ハ面手足とも黒く故

正しく化るはん

猿之圖

俗用猿猴二字ヲ稱ス

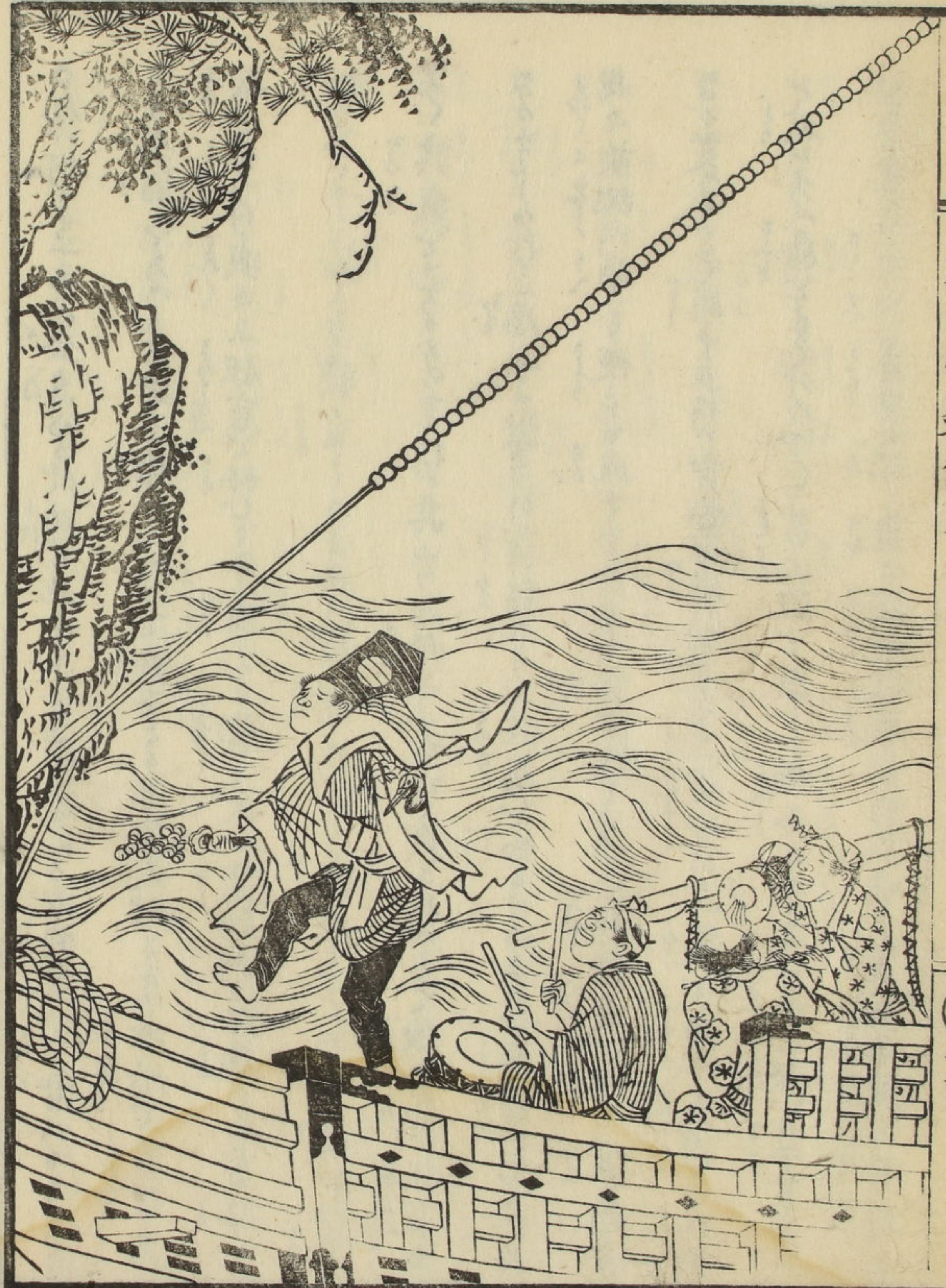
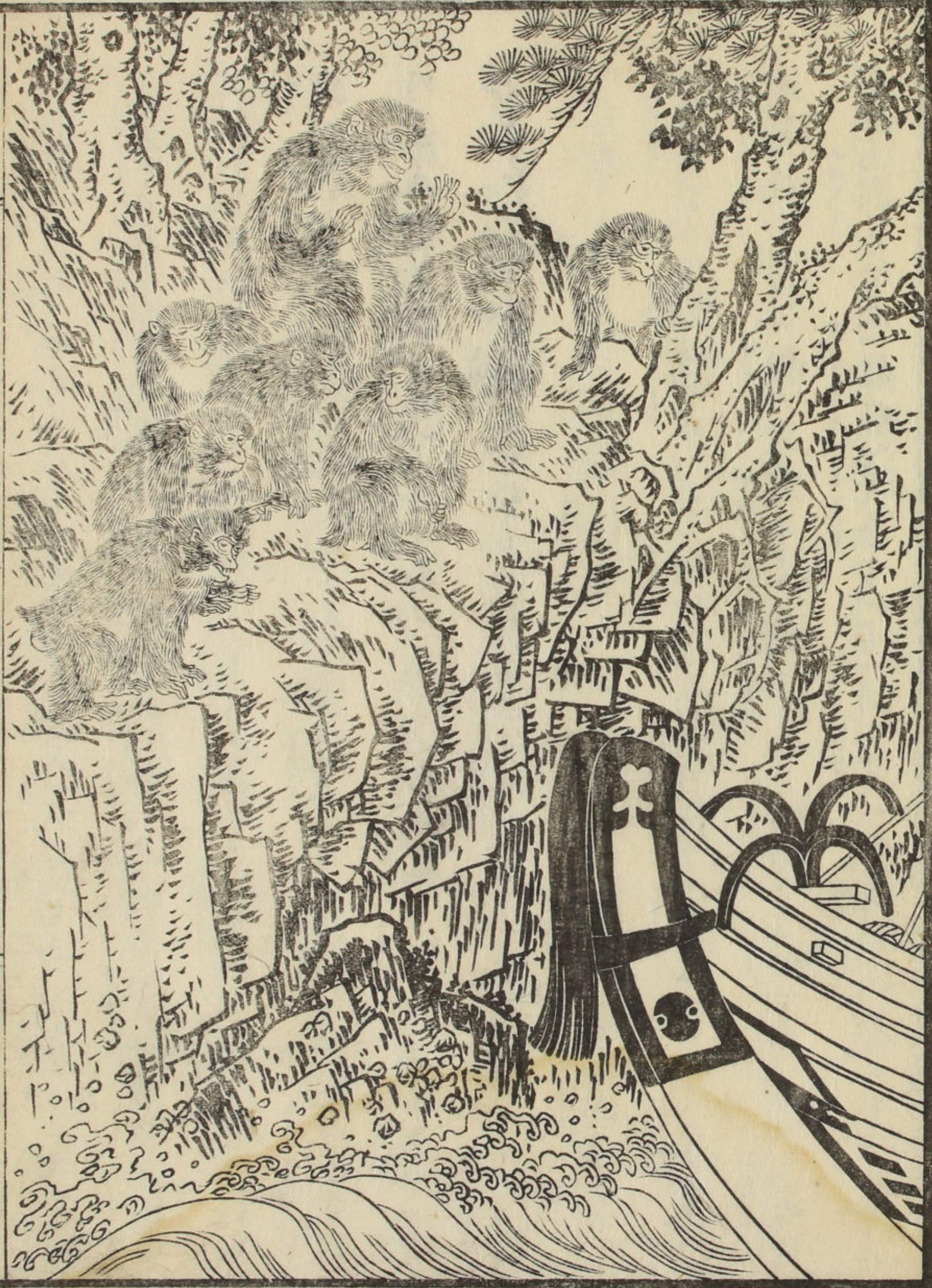
和漢三才圖會按猿即猴本朝未レ有之自中華來り有畜之耳云然ハバハ人舶來して畜す更ハ有るべし



狙仙寓 縮圖

○浪花の俳優先代竹中綱八自明和至寛政役者幕内忠信の喜助と異名とつけ離子
 方より旅芝居西國へ下り難船と衣裝道具と言ふ及も一統は衣類を
 失ひ怪我を帰りと悦ぶやも支うしよ此喜助一人鞍と放る携へる
 故斯の号とを此者度々西國へ下り難船あり一は一年長州へ
 芝居下る折る澳あり丑寅の暴風ふりり一天墨と流せし如く
 ふうれ曇り波濤頭上小踊船の數十丈も上り下りて船中の人恰も米俵と
 りとりとぶぶく右ふこぬび左又まろび今や此船海底に沈みあんと
 思ふもつらり原未雨の車軸と流しし船頭水玉の帆とある命を
 了ふもつらき何方も漕付んとし時又一統祈誓をわけし神仏の加
 護うや少し風や波ややうまうらうら松風の音ききりふ聞へられ船頭

是と考へ是は島々山々近づく風と音と的と遠りゆくは櫓と舟と
 腕も折れ漕やぶ次第く小諸木の葉音近づけ皆々是ふか得く島は
 くと尋めらる風大おや浪きつふそく闇夜のぞれ空も見うち暗る
 日の光ぬぬる船中一統蕪生のそら何お譬んぬる時小近づけ山を見
 見何國もあぬ島山より更お人家の有も見づれども命助けしよ
 神仙の加護ありと悦びつ船ふ入る途と入出船の破損と修理とらら嶋
 山の松の枝は枝一足顔と出し此船と見つけ驚るるや忽ち枝とさうて奥
 山へ行々暫くとも追々は数多の猿出まり次第く小群と
 其数らげておとくは猿の後辺みるび木の枝お上りて船中と指ざりキヤツ
 くともめま啼立々又暫く有るる山奥へけ入る皆々是を見



今又猿の為ふ打ん中をるんこと可笑なれとて一人は是ぞ命を助り悦びの舞
 とてあそびれとあめく思つて笑を催し奥ふ乗とて離子立れば吉藏は三番叟
 とひやると只あんなくと鳥とびやう鳥のまねやう拍子ふやうて舞なれを
 猿は是と見ると大猿を向ふへ又々かき出岩上よのせめめく声を立て飲ぶ
 りつとぬ彼老猿も手と上うあめくとうめくが如く悦ぶてふふ船中の者
 ともなればこそと離子とあうとあせふ水主船頭も浮れ出く鉢をさじ舟板
 とたきく合ふれば吉藏は益浮き鈴と扇と歩捨く花笠と両手ふりち
 三番叟の鐘が岬めく腹をかく可笑なり是よりせく離子立
 漸舞終りければ猿は以前のど頭と下り辞箋をさる如くあふ又彼大猿を
 かた山奥へとりぬ一統顔と見合ると一同は笑ひつ汗を拭ひるるぞ可笑なれ

かゝる処は又むくくと猿出まりめく何れ手はく携へ来り岩の上は搔より
 て舟の艦と見ゆけてあそむく礼をさる如く又山ふ入ぬあめく是と見よ則
 章魚と何の用捨もさく乾るものさる曾く聞及ぶ猿は海辺をく蜻とさる
 木の枝あどふりけて乾食物とさるよ符合せり正し是を礼ふ持来り
 あんと其志と感賞し思ひ落涙する畜類さる吉藏が無法の三番叟の價
 とて許多の予章魚と恵さる夫より之浪華とて無錢の多さる又笑ひ催
 する時又毫足の猿出まりて今度の高き松の枝より遠方より
 形勢ゆるぬ是は濠州の方と教ゆらると磁石を取らる見れば則東方
 と教ゆらゆるめく兼知のともは點頭つ夫より東とさる行々が折るも
 西風吹出く三日ゆく山と見つけば後長門國ふ著るるぞ

X

○三好正慶ミチノアキ尼に俗よ稱な木津屋雪きつやゆき兼葭堂主人の死を悼と贈る文云 自筆寫

泣死よわが——戸次人兼葭堂と生為す
 佛方行の終極の世の言はるる母の心
 なる生得乃の心ぬい普く世の心しわが
 事ふ可思議の中縁有てちしきもあ
 わらふもた終るな女焼なまも其の
 をあ——とす若も——とすはるる
 子福もいと孫むらうはあも——とす

も少終るまふらう沙那山柳里
 素よひも——かり——みそ兼示女と
 ちの婦もよ初らり可安なりみそ
 こらうの言も縁あよら——とす
 本村氏へ姉へあ——とすはるる
 告知せらるるわ——とすはるる
 赤月と地なりと終るまふらう

孫甥孫意の事をもあつたに於て我の事
 後の事のことも頼意の存に於て世の事
 享和二年七月の中宮よき乃始の事か
 して備へる事よき例に於て世の事
 中御をせり一孫の事もあつたに
 うの事有てし事よき例に於て世の事
 やうよき例に於て世の事
 世の事よき例に於て世の事

系図全てもんごうに
 事あるに成るもその事よき例に於て
 の事よき例に於て世の事
 の事よき例に於て世の事
 悔の後悔の事よき例に於て世の事
 有る事よき例に於て世の事
 なる事よき例に於て世の事

可中ひあはれとけのうすく由きかえ生
乃中事一を歌ふの悔も守き人も教く
と為るうき世の御よもいふも更らぬ
と多幸の家乃つとるぬらひの銭さぬか
情の悴も思ふなりとも申侍る

なまふ人も何れもみ孫え
朽く流行の風もかきかす人

三好氏老婦
正考及告白

按正慶ハ文化三年ニ没行年七十八也然
當享和二年ハ七十四也ノ時也

○相撲の関取とまひん せんとりの谷風やまかぜ梶之助かぢのすけハ古今ここん ぐん無双むすぶの力者りきやあるをハ世人よあひと普く知る所
あり言いふ及およびた和歌わかの心こころがけなど有ありる手ても拙こるは是これホの夏なつ
人ひと志こころが存ぞんじあり或人あるひとの藏くらせ真跡まあとを乞得こひえて写うつせると次つぎに出いる
生年うまれハ寛延三年かんえんさん申まをして寛政七年かんせいしちねん乙卯きのとらう正月九日しんげつくにち流行りやうぎやうの風邪かぜホ染しみる病びやう死し
と行年まかり四十六よんじゅうろくにん法號ほふがう釋姓しやくせい谷郷やちやう音了おんりやう風

秋波之渺兮
身如之此兮
何之實之私方兮
知月君法之
以此良用也

王君政其
以此良用也

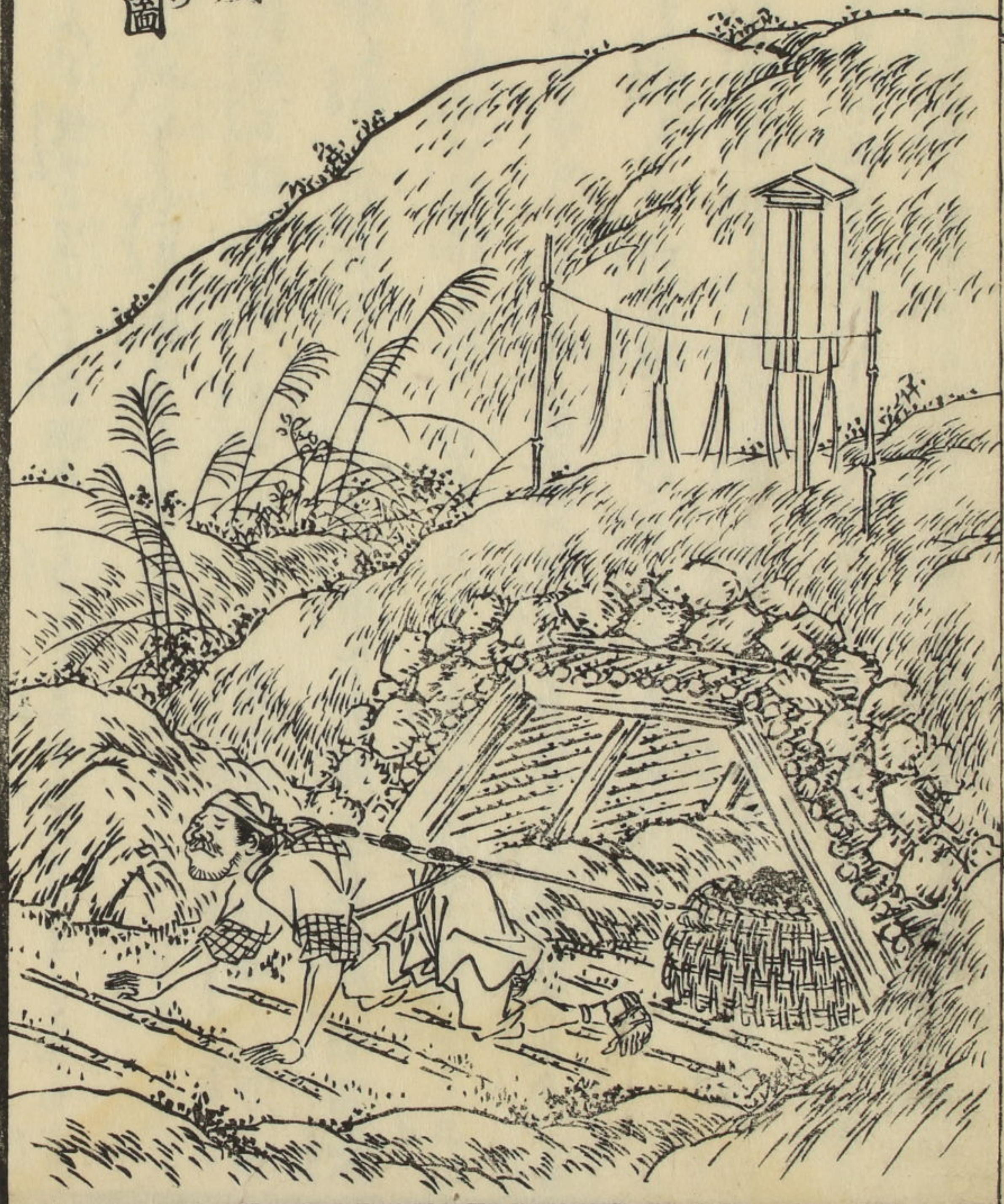
蕭蔭堂

三
蕭蔭堂

○信乃松本の城のありて武田信玄の居城ありて深瀬の城と号せし所ありとぞ
 當時例年正月十日塩市ありて大湊會あり生土宮村大明神の社司當日市神
 大明神云と号し城下の市中に社檀と名づけて神夏と執行し遠近よりこれに
 郡衆して賑ふる也觀物放下師ありて夥く有る隣國は無雙紋日あり然るも
 亦城下の富家よりて塩と此の紙とつと黍詣の多勢を施しありて是を受
 得て家土産とて或は神棚に供ふ此更往昔より有る其初ること最久とぞ
 里人傳へて云往昔戰國の折り敵方よりて當國へ塩運送の道と寒く
 國兵と苦めんとり程より自りて塩を漸く盡く國兵志づき氣力を
 失ひ幾難儀も及ぶ然るも隣國の好むと以越後の長尾謙信より塩を
 運送と國兵これより力を得て戦ひも敗せば頗る勝利を得ることをぞ

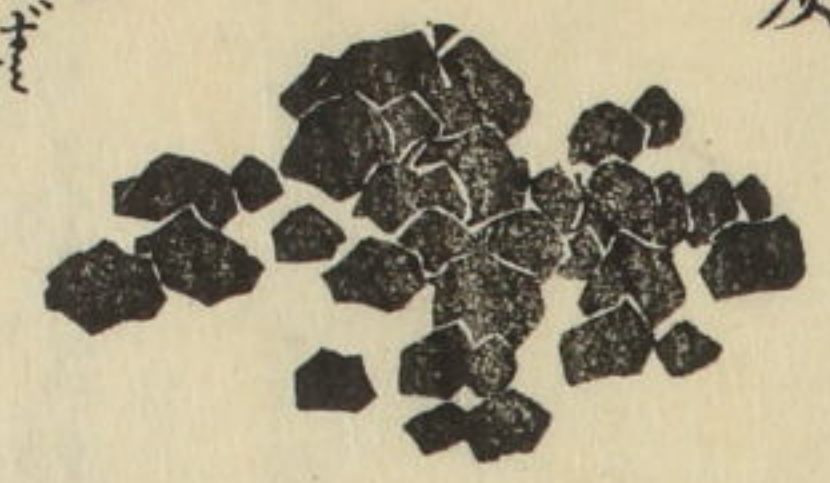
吉例より後世よりても尚塩市と号し是を祝ふりのありと聞ゆ實
 塩の五味の中より一日も飲べざるものあり
 近代正説碎玉語云北条と今川と相計り遠州武州の塩商人を留め甲
 斐信濃に塩を運ぶに以て信玄の兵を困ると謙信これと聞て領國の取
 路を令して塩を甲信濃に運ぶに我の兵を以て戦ひと決せん塩を以て兵を
 窮せしむることせしと言送るまられ信玄受られり是謙信の義あり
 且勇なる所あり云と則此時の更と言傳ふるものあり
 ○石炭は中國九州より多し出せり俗に五平太と云ふ其初五平太と云ふ者の堀
 出せりる乎塩濱の薪を代りてこれを用ひ其石炭を取て金銀と堀出ると同く
 山を鑿穴と爲し左右上より丸木を以て囲み漸く鑿入ると數十丈取得て外

石炭
堀の圖



石炭

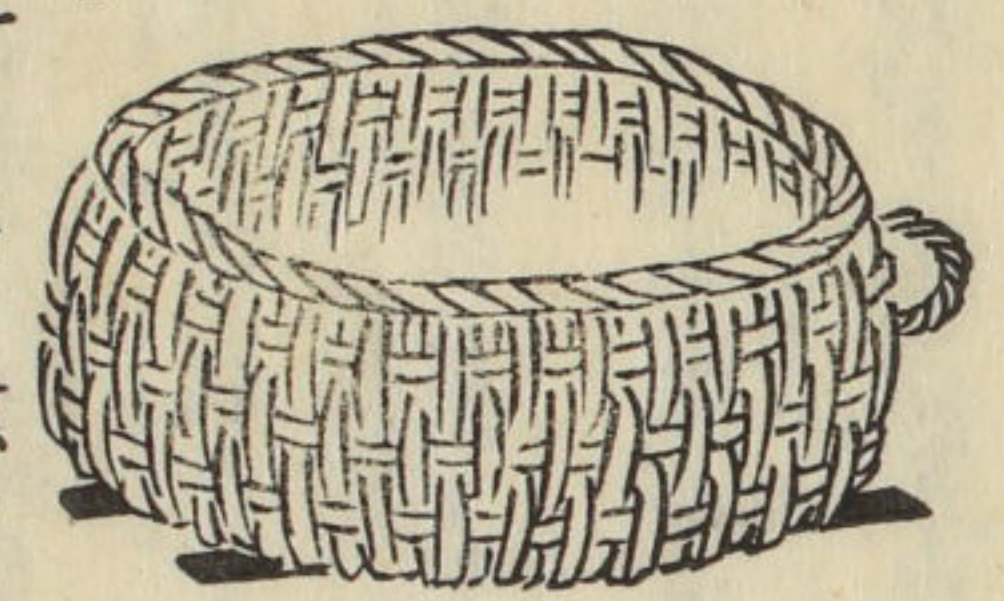
細き
堅炭の
ご



籃

石を盛て
引出き

あり
竹製也

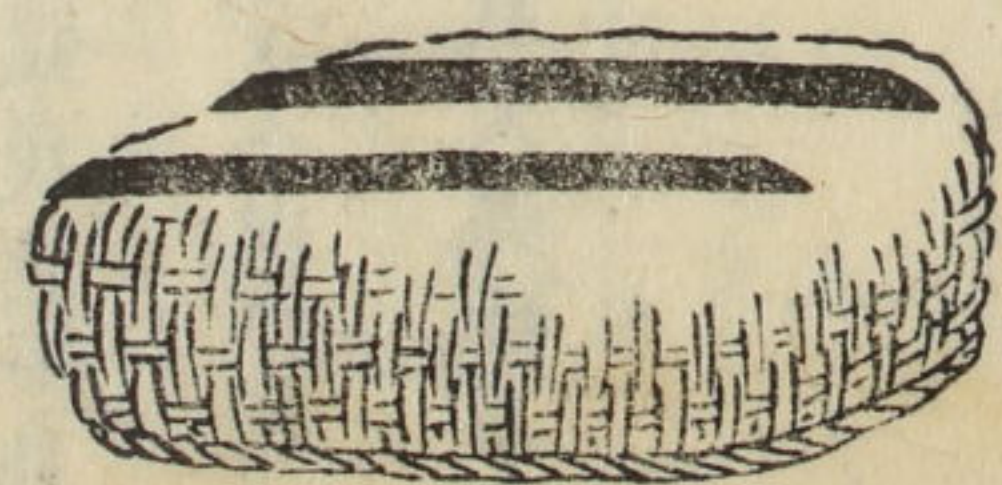


是ハ鉄の金具中へ穴口
低き更たの出るふよの
丸木を細のすま
きまざる用心あり

底の
器

底のさん鉄の板金と
打つけり器も

引き出るふかごの
底の破きざる
用意也



山をうがちて
石を取具なり

